



マナ せんせいが いちばん いんしょうにのこった おしごとは なにかにや？

広瀬 金沢の21世紀美術館でのお仕事ですね。これが思いがけないところからくるわけですよ。編み物といえば、講演会や講習会に行くのが普通のことでしたけど、美術館の学芸員の方が来たときは驚きました。二百坪もあるようなところにまた新しいものを作らなきゃいけないわけですから。とてもじゃないけど無理だろうと思ったんですけれども、話を聞くと、一年間のイベントだと、そして今回は着るものじゃないものをつくってほしいと。会場にある毛糸玉から半年間で作りあげて、その残り半年間でみなさんに見てもらおうようなものにしたっていうことだったんです。そこまでよく

わかったんだけれども、その時もう一つ、心が動いたのが、西山美なコさんっていう現代アートのアーティストの方とのコラボレーションをしてほしいということ。今まで手芸作家さんの知り合いはいたんだけれども、全く違う業種の方とどういうものを創りだしていくのか、とても興味が湧いてきたんです。

ユウ それは新たな挑戦どすなあ！

広瀬 でしょ？それと、その学芸員さんが「先生、編み物のアートですよ」っておっしゃったの。「先生はよく、糸一本から何でもできるっておっしゃってるじゃないですか」って。やっぱり世間の編み物のイメージは、「寒さをしのぐもの」のよくな、家庭に密着した庶民的なものではあるんだけれども、じゃあそこに人間国宝がいるかっていうとそうではないし、同じ技術であっても染めや織りにはいて、編み物っていないんですよ。それをその学芸員さんが「アートですよ」っていったことは、自分もどこかで、ニットというのは普段着じゃなくてパーティにも着ていけるような、そういうものであってほしいって思いがあったんです。そこで、じゃあこの自分がつくるものが、アートとどういう風に重なり合って、美術館に来場される方に見ただけでわかるだろうと。心が動いて、お引受けすることになったんです。

マナ マナちゃんも ニットドレス きたいにやん♡

ユウ ニットの価値を高めるきっかけになりそうな取り組みどすなあ。どんな展示になったんですか？

広瀬 まずは5メートルくらいのあずま屋をつくって、西山美なコさんが骨組みを作って私が埋めていくの。最初お城って言われて、お城はさすがに無理って言って(笑)やっぱり非常に貴重な経験ですよ。で、そこにボニーでお花畑を編んで。それも普通だったら私たちがつくったもので終わりなん

だけれども、来場者の方々につくってもらうんです。編める方はかぎ針の立体的な花、子どもたちはぐるぐる定規に巻いて、真ん中を絞っちゃう。そんなものをみんな溜めていくんですよ。それが1週間1か月たっていくと、美なコさんたちは「今日はピンクをここにしよう、明日は白が足りないから白を編んでもらおう」っていうことで、庭が6か月間かけてだんだんできてくるんです。

ユウ それは壮大な企画どすなあ！

広瀬 毎月毎月行くたびに私もそこに座って、みんなて話をしながら編み物をつくっていくんです。なかなか一般の方と接する機会もないし、大変だった分だけやっぱりできあがったときは感動でした。それまでは妹のウエディングドレスとか言ってたんだけれども、やっぱりその比じゃなかった！その時の作品は、今コレクションとして保管してあるので、いつかまたね、組み立ててお披露目できたらいいなと思っています。

マナ マナちゃんも みてみたいにやん！

ユウ 21世紀美術館でのお仕事も刺激的でしたけど、これからさらに挑戦してみたいことはありませんか？

広瀬 やっぱり、毛糸で編んで当たり前、レース糸で編んで当たり前じゃなくて、毛糸の素材を使って全然違ったものを表現するようなことにチャレンジしてみたいなって思います。着るものではない何か、「えっ？」って驚かされるような編み物の可能性を追求していきたいですね。

マナ マナちゃんも いっしょにおもしろいことしたいにやん！

ユウ 新たなブームが生まれる予感がしますなあ！今日はほんまおおきにどすう